

期 昭和五十八年十月十七日～十一月五日  
於 図書館三階閲覧室(本館)

中世歌謡

中世歌謡は、大きく分けて三つの時期に大別できる。前期に今様・宴曲・平曲、中期に田楽・猿楽等の能謡狂言歌謡、そして後期には、小歌・幸若舞曲・田植卓紙系歌謡等の音曲をもった歌謡である。これらの中で、本館所蔵の宴曲、小歌の資料を中心として紹介していきたい。宴曲は、別称「早歌」といわれ、当初は上流貴族の宴席でうたわれ、初期は短小詩であったが、発展して「物づくし」や「道行」といった長形式に移行した。しかし南北朝期・室町期に高潮期をむかえ、次第に、「早歌うたい」といわれる門付遊芸者の歌謡に変容し、後期歌謡の中心である小歌にその地位を譲るのである。小歌は、民衆の生活感情を素直に表出し、民衆のエネルギーの発露として発展、洗練されていく、初期的には、「閑吟集」が代表であり、「宗安小歌集」、「隆達小歌」として開花するのである。

(1) 「宴曲十七帖」

(常磐松文庫)

明空編 写本十七冊(九集) 美濃判 奥書・外題なし 「明治期写」 墨譜・朱書入  
「宴曲十七帖」の内訳は、撰要目録一冊・宴曲集五冊・宴曲抄三冊・真曲抄一冊・究百集一冊・拾葉集二冊・拾葉抄一冊・別紙追加曲一冊・玉林苑二冊である。  
編者明空は、宴曲の集大成者であり、作詞、作曲、作曲も手がけ、在来の宴曲を一新し、発展させた功労者である。「撰要目録」によって、鎌倉時代の宴曲の名手の人名も確認される。この「宴曲十七帖」は、本館所蔵の「宴曲抄」(貼紙に、明治四十五年 京都府立図書館本の転写の由がある)と同様の影写本と思われる、筆勢が似ており、料紙が新しいことなどから、明治期の写本と推定している。

(2) 閑吟集

(常磐松文庫)

写本複製版一冊 昭和五十一年 ほるぶ出版刊 原本は宮内庁書陵部蔵 続群書類従本  
閑吟集は、その真名序に「永正戊寅稿八月」とあり、仮名序とあわせると、成立は、永正十五年秋八月、編者は富士の遠望できる庵に住む一隠者であるが、誰なのかは、諸説あり未詳である。なお閑吟集は、小歌はもとより、早歌、狂言小歌、大和節、田楽節等の猿楽能謡の小歌節歌謡の集成したものである。

(3) 「宗安小歌集」

(常磐松文庫)

写本一冊 美濃判 列帖装 「慶長・元和頃写」 題簽・内題なし ちらし書き 料紙色変り  
この宗安小歌集は、閑吟集と隆達小歌の間に位置し、小歌の過渡期を示す資料である。沙弥宗安が編者であるが、いかなる人物かは、不明である。また成立年代も室町末期から江戸初期以前とおおまかにしか限定できない。なおこの宗安小歌集は、笹野堅氏所蔵本(笹野氏が「室町時代小歌集」として、影印・翻刻されているが、原本は現在所在不明)一本しかなく、本館所蔵本は、全十九首(うち一首重複)しかない抄本であるが、貴重な異本である。

(4) 隆達小歌

(常磐松文庫)

卷子本一卷(五十首) 奥書なし 「江戸初期写」 符点入  
隆達小歌は、堺の隆達が、隆達節小歌といわれるほど、中世小歌の詞章や曲節を洗練させたもので、安土桃山後期に、その隆盛をきわめた。  
本館所蔵本は、他の隆達小歌が百章、百五十章、二百章、三百章など多数の詞章を収録しているなかで五十章と少量ではあるが、最近、卷子の継紙の順序違いが発見され、注目を集めている一品である。